

大雄会の 専門家に聞いてみよう!

PSA検査から診断までの流れ



50歳から考えたい 前立腺がんの話

男性に多いがんのひとつである前立腺がん。初期には自覚症状がほとんどないことも多く、「自分は大丈夫」と思っているうちに見つかるケースもあります。一方で、検査や治療について正しく知ること、早期発見や自分に合った治療選択につなげることができます。この連載では、前立腺がんの基礎知識から検査、治療、泌尿器科に相談すべき症状まで、泌尿器科医の視点でわかりやすくお伝えします。今回は、前立腺がんを早期に発見するための血液検査「PSA検査」についてです。

第二回 血液検査でみる、前立腺からのサイン

前立腺がんは、初期にはほとんど症状がありません。そのため、早期発見のきっかけとなるのがPSA（前立腺特異抗原）検査です。PSAとは前立腺で作られるたんぱく質の一種で、血液検査によって測定できます。採血だけで受けられるため、身体への負担が少なく、比較的手軽な検査です。

PSA値が高いと前立腺がんの可能性が考えられますが、「高いIIがん」と決まるわけではありません。加齢による前立腺肥大症や前立腺炎などでもPSAは上昇することがあります。そのため、PSA値だけで診断することはできません。

PSA値が高かった場合には、まずMRI検査などで前立腺の状態を詳しく調べます。必要に応じて直腸診や前立腺生検を行い、採取した組織を顕微鏡で調べることで診断が確定します。

近年では、PSAが高い場合には、まずMRI検査で前立腺を詳しく調べることが一般的になって

います。MRIでがんが疑われる場所やその可能性を評価したうえで、生検が必要かどうかを判断することで、不必要な生検を減らし、必要な方にはより精度の高い検査を行えるようになってきました。

前立腺がんは、早期に見つければ治療の選択肢も広がります。50歳以上の方や、ご家族に前立腺がんになった方がいる場合は、PSA検査について一度かかりつけ医や泌尿器科へ相談してみるとよいでしょう。検査を受けることが、ご自身の健康を守る第一歩になります。

第三回では、前立腺がんの治療についてお話しします。



監修

総合大雄会病院 泌尿器科

たか きみ あき

高木 公暁 医師

（主な資格）

・日本泌尿器科学会 泌尿器科専門医
・日本透析医学会 透析専門医

